

## 2018 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	教授	肥田 幸子
最終学歴	学 位	専 門 分 野
金城学院大学大学院人間生活学研究科（修士課程） 人間発達学専攻修了	修士 (人間発達学)	臨床心理学

### I 教育活動

#### ○目標・計画

##### (目標)

「オンリーワンを一人にひとつ」というコンセプトフレーズが掲げられた。私の教育活動においては個々の学生のもつ固有の良さを最大限引き出せるような教育をするということであると考えている。また、具体的な学生像としては、本学の建学の精神「真に信頼して事を任せうる人格の育成」で掲げられているような、責任感があり、心身ともに健全な学生の育成を目指す。

担当する心理の領域においては、学生が心理に関する基礎的知識を修得し、人の心の動きや行動を科学的に考える力をつけることを目標とする。同時に、学生自身が心の健康を保ちながら、青年期課題を乗り越えられるように指導する。

前年度の授業評価はアンケート実施科目においては、ほとんどが学校平均より高く、総じて良いといえる。ただ、多人数クラスが多いためにほとんどが一方向的な講義形式にならざるを得ない。これをどのようにして双方向性のある授業にし、それぞれの学生の良さが伸びていくような授業にするかが課題である。私語を押さえながらも自由な発言が飛び交い、学生の着想がどんどん表現され、それを整理していくのが教員の役目というような授業が目標である。

##### (計画)

カウンセリング基礎演習・演習では模擬カウンセリング実施し、学生が相互に意見を述べ合える授業にする。この授業においては目標に掲げた「個の良さを最大限に引き出す」授業を可能にすることができる。総合演習Ⅰ・Ⅱでは、グループワーク、構成的エンカウンター、サイコドラマ等体験的学習を中心に学生が対人スキルを向上し、他者理解・自己理解を深める。この授業は目標に掲げた「真に信頼して事を任せうる人格の育成」を目指したい。人間と心理、カウンセリング概論では各分野の基礎的な知識を習得させる。教育相談では基礎知識に加え、今の教育現場の現状を伝える。これを行うことで、教員志望の学生がより教育現場に対し興味を持てるようにする。専門演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳでは、卒業論文を書くという目標のもとに文章力、思考力、プレゼンテーション力を総合的に養う。人数が多くないので、個人の特徴を考慮しながら授業を進める。

#### ○担当科目（前期・後期）

（前期）心理学研究法、人間と心理、教育相談、カウンセリング基礎演習、基礎演習Ⅰ、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）カウンセリング概論、カウンセリング演習、基礎演習Ⅱ、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究

#### ○教育方法の実践

卒業研究では、本年度は6名のゼミ学生が卒業論文の単位申請をした。結局書き上がったのは4名であったが、それぞれ質の良いものになったと考える。その内3名はアンケート調査から分析、先行研究を踏まえた分析とオーソドックスではあるが、時間と手間をかけた研究になった。

カウンセリング基礎演習・演習では学生の模擬カウンセリングを録画し、逐語録を作成してカウンセリング方法の検討を行った。自分たちのカウンセリング映像を見ながらの検討というのは独自の方法であるといえる。総合演習Ⅰ・Ⅱでは、構成的グループエンカウンター他を用い、自己理解、他者理解が深まるように体験的学習を行った。総合演習Ⅱのフィールドワークでは、名東福祉センターを利用する高齢者との交流を行った。専門演習Ⅰ・Ⅱではグループで、Ⅲ・Ⅳでは各学生が個別に卒業論文・ゼミ論文を作成した。人間と心理、教育相談、カウンセリング概論は多人数クラスであるため講義形式となりグループワーク等の体験的学習は難しい。しかし、できるだけ相互学習が行えるようにクイズ形式や2人組ワークが行えるよう工夫した。

#### ○作成した教科書・教材

人間と心理、教育相談、カウンセリング概論、保育教育相談ではパワーポイント用スライドを各科目、約150枚を作成。カウンセリング基礎演習、カウンセリング演習では模擬カウンセリングの収録DVDを18枚、各逐語録、箱庭シートを作成。総合演習Ⅰ・Ⅱでは、グループワークのためのワークシート、カード、振り返り用シート等ふまねっと教材を各時間分作成した。

#### ○自己評価

学生アンケートによる授業評価では、前期の教育相談、カウンセリング基礎演習においては平均4.3(全科目平均4.0)、後期のカウンセリング概論、カウンセリング演習においては平均4.4(全科目平均3.9)であり、おおむね目的とした授業効果が発揮されたものと考えている。

今年度の目標として掲げていた多人数クラスにおける相互学習の方法においてはクイズ形式などを取り入れ多少の工夫を加えた。

専門演習のⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳでは、論文作成に関する準備と制作をみっちり行うことができ、研究を通して学生との関わりを深めることができたと考える。

## Ⅱ 研究活動

### ○研究課題

#### 1. 発達障害傾向をもつ学生の就業支援の研究

平成25年度から29年度まで科学研究費の補助を得て「発達障害傾向で就業困難が予測される学生に対する診断によらない支援研究」を進めてきた。発達障害傾向の学生のピックアップのための尺度研究やその妥当性、信頼性の研究についてはほとんど終了し、学会発表、学会誌等多くの発表の機会を得た。次はそれに続くための就業に関する支援研究を行わなくてはならない。ニートという言葉で表される就業困難な若者の問題に対し、教育機関において果たすべき課題は多い。この研究は、発達障害とは診断されていないが、似た特性をもち、就業に困難を示す可能性のある学生に対し、新しい切り口からの支援方法を開発するものである。実際に外部機関、若者ハローワークや就労移行支援所等との連携を行いそれら学生の在学中の就労体験を行う。彼らは個々にもてる能力の強弱に極端な差を有するため、周りからの適切な支援無しでは社会適応が難しい。この研究は本当にオンリーワンが輝くための研究である。

#### 2. 小中高等学校生徒を対象としたメンタルヘルス維持と不応防止の研究

小中学校では不登校問題が未だに改善をみているわけではない。この不登校つまり学校不応の状態を、不応兆候、不登校傾向、スクールカウンセラーへの関心とプロセスを追って展開すると仮定した研究である。平成26年度から多くの学会発表を重ねてきた。本年度は論文として発表することが目標である。また、この調査は不応度合いと「見通し力」の関係についても調べている。大学生版「見通し力尺度」(肥田ら2015)は大学生の就業力向上の一環として作成しているが、中・高校生版では、学校不応やメンタルヘルス維持としての使用を目的

とする。

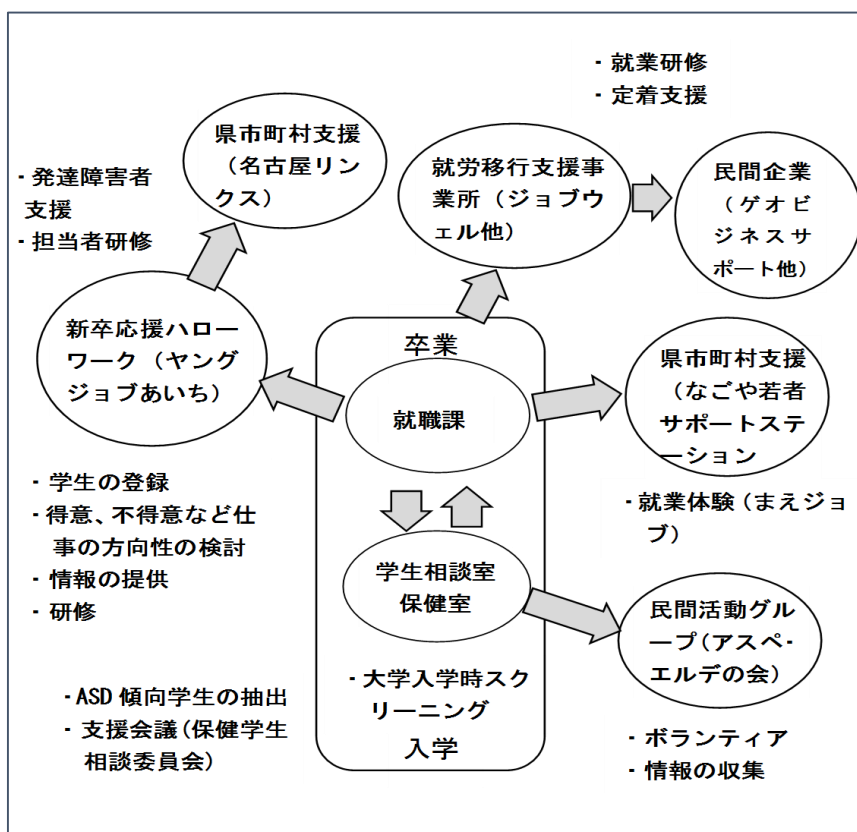
## ○目標・計画

(目標)

1. 「発達障害傾向で就業困難が予測される学生に対する支援研究」に関する論文を發表すること。現在のネットワークを広げて、要支援学生の役に立つこと、またそのシステムを私以外のどの先生でも使用することができる構造化を図る。現在は人的な要素に大きく頼っているのでどの人手もが利用できる要支援学生のための学内外ネットワークを構築する。
2. 小、中、高等学校において収集したメンタルヘルス向上のための資料を分析し数多くの發表をしてきた。今年度はそれらをまとめて論文として發表する。

(計画)

1. 「発達障害傾向で就業困難が予測される学生に対する診断によらない支援研究」尺度の作成に関する研究論文は現在執筆中で、年度内に發表したい。  
就労移行支援所（リタリコ、ジョブウェル等）やヤングジョブあいち等、また学内でのネットワーク、(下図)を展開していきたい。



2. メンタルヘルス調査の質的分析結果を日本心理臨床学会（2018年9月、神戸）において發表する。論文に関しては日本心理臨床学会に提出しており、査読中であるため本年度中には發表される見通しである。

## ○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

(著書)

- ・澤田節子、肥田幸子、尚爾華、中野匡隆、谷村祐子、木野村嘉則「地域在住高齢者の心の健康支援」第4章 『地域創造研究所叢書、唯学書房、2017年』
- ・肥田幸子、堀篤実、松瀬留美子、鈴木美樹江、清水紀子、八木朋子、伊藤佐枝子、吉村朋子「発達障害の子どもをもつ親への支援から見たもの」第8章 『子どもの心を支えるー今を生きる子どもたちの理解と支援』地域創造研究所叢書、唯学書房、2016年、iv-vi、98-116

- ・宗貞秀紀、堀篤実、吉村譲、肥田幸子、宮本佳範、手嶋慎介、松村幸四郎「ドメスティックバイオレンスー女性への人権侵害がなぜなくなるかー」第4章 『人が人らしく生きるためにー人権について考えるー』 地域創造研究所叢書、唯学書房、2013年、63-75

(学術論文)

- ・鈴木美樹江、大塚敬子、肥田幸子、向井麻美子、廣浦美穂「小学生の学校不適応感がスクールカウンセラーへの関心に与える影響」『心理臨床学研究』Vol. 36、No. 6、2019年、査読有り
- ・肥田幸子、堀篤実、鈴木美樹江「自閉症スペクトラム障害傾向を有する学生のための“見通し力”尺度作成の試み」『学生相談研究』、第37巻、1号、2016年、27-36 査読有り
- ・肥田幸子「自閉症スペクトラム傾向の子どもをもつ母親の心理的体験過程」『東邦学誌』第45巻、1号、2016年、49-59
- ・肥田幸子、丸岡利則、照屋翔大、正岡 元「大学への帰属感と意味づけが学校不適応に及ぼす影響」『東邦学誌』第45巻1号 2016年、61-71
- ・肥田幸子「発達障害傾向をもつ高校生の自己認知の特性」ー教師の理解との相違点を探るー『学校メンタルヘルス』Vol. 18-1、2015年、22-29 査読有り
- ・澤田節子、肥田幸子、尚爾華、中野匡隆「地域在住高齢者の健康維持活動支援に関する調査」『東邦学誌』第44巻、第2号、2015、147-161
- ・肥田幸子、澤田節子「大学生の進路選択行動に影響を与える要素」『東邦学誌』第41巻、第10号、2012年、147-161
- ・肥田幸子、澤田節子「大学生の就業意識形成のプロセスに関する研究」『東邦学誌』第40巻、第1号、2011年、153-168

(学会発表)

- ・谷口由香莉、肥田幸子、鈴木美樹江、大塚敬子、馬場ひとみ「学校適応に関する SCT (Sentence Completion Test) 研究 (7)」2018 神戸国際会議場 日本臨床心理学会第37回秋期大会論文集 PB1-H
- ・馬場ひとみ、鈴木美樹江、大塚敬子、谷口由香莉、肥田幸子、加藤大樹「小学校におけるロールフルネスに関する研究 (1)」ー小学生版ロールフルネス尺度の因子構造の確認と信頼性の検討ー 2018 神戸国際会議場 日本臨床心理学会第37回秋期大会論文集 PB1-E
- ・大塚敬子、鈴木美樹江、馬場ひとみ、谷口由香莉、肥田幸子、加藤大樹「小学校におけるロールフルネスに関する研究 (2)」ー学年差による検討ー 2018 神戸国際会議場 日本臨床心理学会第37回秋期大会論文集 PB1-F
- ・鈴木美樹江、大塚敬子、馬場ひとみ、谷口由香莉、肥田幸子、加藤大樹「小学校におけるロールフルネスに関する研究 (1)」ー不適応要因とロールフルネスが不適応徴候に与える影響ー 2018 神戸国際会議場 日本臨床心理学会第37回秋期大会論文集 PB1-G
- ・肥田幸子、谷口由香莉、鈴木美樹江、大塚敬子、馬場ひとみ「学校適応に関する SCT (Sentence Completion Test) 研究 (6)」2017 パシフィコ横浜 日本臨床心理学会第36回秋期大会論文集 PB3-19
- ・谷口由香莉、肥田幸子、大塚敬子、馬場ひとみ、鈴木美樹江「学校適応に関する SCT (Sentence Completion Test) 研究 (5)」2017 パシフィコ横浜 日本臨床心理学会第36回秋期大会論文集 PB3-18
- ・大塚敬子、鈴木美樹江、馬場ひとみ、谷口由香莉、肥田幸子「小学生における不適応プロセスの研究 (6)」ー3年間の縦断的研究による学年佐野比較検討ー 2017 パシフィコ横浜 日本臨床心理学会第36回秋期大会論文集 PB3-20

- ・馬場ひとみ、鈴木美樹江、大塚敬子、肥田幸子、谷口由香莉「小学生における不適応プロセスの研究（7）—3年間の縦断的研究からみた学校不適応感と欠席日数との関係—」2017 パシフィコ横浜 日本臨床心理学会第36回秋期大会論文集 PB3-21
- ・鈴木美樹江、大塚敬子、馬場ひとみ、谷口由香莉、肥田幸子「小学生における不適応プロセスの研究（8）—3年間の縦断的研究からみた学校不適応感が欠席日数に与える影響」2017 パシフィコ横浜 日本臨床心理学会第36回秋期大会論文集 PB3-22
- ・肥田幸子、堀篤実、鈴木美樹江「ASD傾向学生のための就業力尺度の作成（1）—項目の作成と信頼性の検討—」2016 かがわ国際会議場 日本教育心理学会第58回総会論文集 PD87
- ・堀篤実、肥田幸子、鈴木美樹江「ASD傾向学生のための就業力尺度の作成（2）—尺度の再検査信頼性と妥当性の検証—」2016 かがわ国際会議場 日本教育心理学会第58回総会論文集 PD88
- ・鈴木美樹江、肥田幸子、堀篤実「ASD傾向学生のための就業力尺度の作成（3）—見通し力が就業力に及ぼす影響—」2016 かがわ国際会議場 日本教育心理学会第58回総会論文集 PD89
- ・山内貴恵、肥田幸子、谷口由香莉、向井麻美子、鈴木美樹江「学校適応に関する SCT(Sentence Completion Test)研究（3）—学校不適応傾向とクラスの友だち及び通学班の関連—」 2016 パシフィコ横浜 日本臨床心理学会第35回秋期大会論文集 PB05-03
- ・鈴木美樹江、馬場ひとみ、肥田幸子、廣浦美穂、山脇麻由美、大塚敬子「学校適応に関する SCT(Sentence Completion Test)研究（4）—学校不適応傾向とスクールカウンセラー及び教師イメージとの関連—」 2016 パシフィコ横浜 日本臨床心理学会第35回秋期大会論文集 PB05-04
- ・肥田幸子、堀篤実、鈴木美樹江「見通し力尺度作成の試み（1）」—大学生を対象として— 2015 日本教育心理学会 第57回総会 新潟朱鷺メッセ 日本教育心理学会 第57回総会論文集 2015
- ・堀篤実、肥田幸子、鈴木美樹江「見通し力尺度作成の試み（2）」—尺度の信頼性と妥当性の検証— 2015 日本教育心理学会 第57回総会 新潟朱鷺メッセ 日本教育心理学会第57回総会論文集 2015
- ・鈴木美樹江、肥田幸子、堀篤実「見通し力尺度作成の試み（3）」—AQ 下位尺度が見通し力に及ぼす影響— 2015 日本教育心理学会 第57回総会 新潟朱鷺メッセ 日本教育心理学会 第57回総会論文集 2015
- ・肥田幸子、鈴木美樹江、山内貴恵、廣浦美穂、大塚敬子、向井麻美子「小学生版「見通し力尺度」作成の予備研究」2015 日本臨床心理学会 第34回大会 神戸国際会議場 日本臨床心理学会 第34回大会論文集 2015 634
- ・廣浦美穂、鈴木美樹江、大塚敬子、向井麻美子、山内貴恵、肥田幸子「小学生における不適応プロセスの研究（1）」—横断的調査による学年差・性差の検討— 2015年 日本臨床心理学会 第34回大会 神戸国際会議場 日本臨床心理学会 第34回大会論文集 2015 629
- ・大塚敬子、鈴木美樹江、山内貴恵、廣浦美穂、向井麻美子、肥田幸子「小学生における不適応プロセスの研究（2）」—縦断的調査による学年差の検討— 2015年 日本臨床心理学会 第34回大会 神戸国際会議場 日本臨床心理学会 第34回大会論文集 2015 630
- ・向井麻美子、鈴木美樹江、大塚敬子、山内貴恵、廣浦美穂、肥田幸子「小学生における不適応プロセスの研究（3）」—縦断調査による不適応プロセス尺度間の関連— 2015年 日本臨床心理学会 第34回大会 神戸国際会議場 日本臨床心理学会 第34回大会論文集 2015 631
- ・鈴木美樹江、大塚敬子、向井麻美子、廣浦美穂、山内貴恵、肥田幸子「小学生における不適応プロセスの研究（4）」—交差遅延モデルを用いた影響関係の検討— 2015年 日本臨床心理学会

第34回大会 神戸国際会議場 日本臨床心理学会 第34回大会論文集 2015 632

- ・山内貴恵、鈴木美樹江、肥田幸子、大塚敬子、向井麻美子、廣浦美穂小学生における不適応プロセスの研究（5）—学校不適応プロセスと不登校系呼応との関連— 2015 日本臨床心理学会 第34回大会 神戸国際会議場 日本臨床心理学会 第34回大会論文集 2015 629
- ・鈴木美樹江、肥田幸子ほか「小学生版学校不適応プロセス尺度作成の試み(3)」日本臨床心理学会 第33回大会 パシフィコ横浜 2014年 日本臨床心理学会 第33回大会論文集 2014 442
- ・HidaSachiko OkuboYoshimi SuzukiMikie「Perception Gap between Japanese Teachers and High-school Students on Developmental Disorder Tendency」The 35th International School Psychology Association Conference (ECP 2013) 17-20 July 2013 Porto Portugal
- ・鈴木美樹江、肥田幸子ほか「高校生の不適応徴候感が登校状況に与える影響過程」日本臨床心理学会 第32回大会 パシフィコ横浜 2013年 日本臨床心理学会 第32回大会論文集 2013 470
- ・肥田幸子、澤田節子「大学生の進路選択行動を支える大学の支援」第54回教育心理学会総会 琉球大学 2012年11月 日本教育心理学会発表論文集 2012 188

#### <学会分科会>

- ・肥田幸子 大学教育改革フォーラム2017「発達障害及び発達障害傾向学生への支援の現状」発表者 2018年3月10日
- ・肥田幸子 日本フェミニストカウンセリング学会第10回大会「発達障害と女性支援」コーディネーター2013年

#### (その他)

- ・肥田幸子、丸岡利則、照屋翔大、正岡元「人間学部中途退学防止調査報告書」2015年
- ・肥田幸子「発達障害と女性支援」『フェミニストカウンセリング研究』Vol.11、2014年、106-109
- ・肥田幸子他「学校と通級指導員にSCの果たせる役割」『学校臨床心理士活動報告書』2014年

#### ○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

- ・平成24年度：科学研究費補助金（基盤研究C）交付（代表者）

#### ○所属学会

日本心理臨床学会、日本教育心理学会、日本発達心理学会、日本小児保健協会、日本EMDR学会、日本学生相談学会

#### ○自己評価

メンタルヘルス関係の論文1本と学会発表4点を仕上げる事ができた。ことに論文が掲載された『心理臨床学研究』は1回の発行部数が29300部にのぼり、臨床心理学では最も権威あるジャーナルである。ファーストではないが、若い研究者たちと協力しつつ発表することができた。学会発表も小学生のメンタルヘルスに関するものを数点発表した。

就労支援に関する論文は本年度中には掲載されなかったが、次年度には学術論文として掲載予定である。

また、目標に掲げた「発達障害傾向で就業困難が予測される学生に対する支援現在のネットワークを広げて、要支援学生の役に立つこと、またそのシステムを私以外のどの先生でも使用することができる構造化を図る。現在は人的な要素に大きく頼っているのでどの人でも利用できる要支援学生のための学内外ネットワークを構築する」という点においては、大きく前進したといえる。学内においては保健学生相談センターが立ち上がり、心理的に困難を抱える学生や合理的配慮を求める学生、社会的自立に関して何らかの援助が必要な学生を支援するシステムが立ち上がった。学外では、新しく名古屋市発達障害者支援センター（りんくす名古屋）や若者支援ネットワーク

(SyNet) との共同も始まり、要支援学生に対するネットワークの輪は広がっている。

### Ⅲ 大学運営

#### ○目標・計画

##### (目標)

就職委員会の委員としてその責務を果たす。保健学生相談委員会委員として責務を果たす。

就職委員としては現在の自分の研究課題である「発達障害傾向で就業困難が予測される学生に対する支援研究」とも関連があり、力を発揮することができる。一人でも多くの学生が自分にあった仕事を心得て個々が輝けるように支援する。

学生相談室の責任者として、高校も含めた学園全体の心理支援を行う。心理的に支援が必要な学生だけでなく、一般学生のメンタルヘルスを向上し、延いては中途退学予防に貢献する。研究課題でもある、大学生・高校生のメンタルヘルス予防システムの構築を図る。

##### (計画)

大学では新入学生に対して全員のメンタルヘルスチェックを実施した。この結果を分析し、個々の学生が示すメンタル的特徴をゼミ担当教員と話し合いたい。それによって一人でも中途退学、除籍の学生を減らしたい。

年々、心の問題をもつ学生は増えてきている。心理的不適応状態にある大学生のカウンセリングを引き続き行う。

高校においては、新1年生全員のメンタルヘルスチェックを実施し、クラスの担任にフィードバックする。1年生の担任教員全員の面談を行う。本年度はメンタルヘルスチェックの要支援生徒に対して、全員の面談を実施予定である。

#### ○学内委員等

学生・保健相談委員会委員、キャリア支援委員会委員

#### ○自己評価

キャリア支援委員会委員としての責務を果たした。保健学生相談委員会委員としては一委員としての役割のみならず、学生相談室責任者として要支援学生の報告、検討を行った。また、外部カウンセラーと保健担当職員が連携し学生支援が進むように連絡調整を行った。

目標とした新入学時のメンタルヘルス調査を活用した中途退学防止と発達障害傾向学生の支援においては、時間不足で各ゼミ担当と十分な話し合いの時間を持つことができなかった。今後の課題といえる。

高校においては、本年度より週1回のチームミーティング（メンタルヘルス会議）が開かれることになり、毎回参加をしている。これによってよりきめ細やかな生徒対応ができるようになった。

### Ⅳ 社会貢献

#### ○目標・計画

##### (目標)

青少年の心理的不適応、発達障害の研究が広く社会に役立つように臨床や啓発活動を進める。発達障害に関しては中学、高校から現職教育の養成も多く、要請に応じていきたい。DVに関する知識啓蒙のため活動をする。加えて、老年期の心理支援の活動も行う。

##### (計画)

発達障害に関する講演依頼はすでに小牧工業高校から（2018年5月）と日本教育相談学会愛知支部尾張地区カウンセリング講座（2019年2月）の依頼がある。

DVに関する啓蒙に関しては名古屋市の社会講座において要請があれば実施する。

老年期の心理支援は「ふまねっと」を使って毎年、名東福祉センターで学生と共に実施している。

#### ○学会活動等

- ・日本教育相談学会尾張支部 研修会 「発達障がいの理解と対応」講師 2018.2.10

#### ○地域連携・社会貢献等

- ・小牧工業高校 現職教育「発達障害の理解と対応」－将来に向けての支援－ 2018.6.8
- ・東邦高校 現職教育 「発達障がいの理解を深める」 2018.12.21
- ・名古屋市男女平等参画推進センター 2018年度第9回スーパービジョン 2018.12.19
- ・働くを考える 若者支援フォーラム 2019「診断にとられない支援を実現するために」  
2019.2.23

#### ○自己評価

発達障害及び発達障害傾向の学生・生徒の対応に関しては現職の教員たちも対処に苦慮している。教員のための現職教育を2箇所を実施し、大学内でもSDとして全教職員に対して講話を行った。現在、発達障害者支援は草の根的なところでも大きな動きを見せている。これらとネットワークができてきたのは評価できる。

少年院での矯正教育の支援は20年を超えた。この活動は現在休止しているが、DV被害女性対してのカウンセリング、電話相談、社会啓発活動と並んでこれらのボランティアは今後も続けていきたい。

#### V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

自己研鑽として、国家資格「公認心理師」に挑戦し、その資格を取得した。

#### VI 総括

メンタルヘルス分野の論文（査読つき）が1本と同分野の研究発表を4点学会で発表することができた。発達障害傾向の学生の就業支援に関しては現在査読中で2019年度にはジャーナル掲載が可能になると考えている。この分野に関しては重点が調査研究からネットワークを作る社会的な活動研究へと変化をしている。どの研究であっても目標とするところは社会貢献であり、成果はいかに社会に対して有益なものを生み出していけるかである。この研究は最初の調査、尺度作りから現在の行政・民間のネットワークへの協力と社会への啓発活動につながり、今後も成長を続ける可能性がある。

授業に関しては、日常の講義やオープンキャンパス、高大連携授業もよい評価を得ているので、よりいっそうの工夫と開発を心がけたい。

学生相談室の責任者としては学生のケアが面接室内に留まらずいろいろな部署と共働をして学生の支援をしていく必要が生まれてきた。保健・学生相談センターの開設までこぎ着けることができたのは成果であるといえる。今後はこのシステムが有効に機能し、中途退学防止や発達障害傾向学生の就労支援にまで活用できるようにしていかなければならない。

4月に新入生全員にメンタルヘルスチェックを実施した。そのデータを中退防止や就労支援のために十分に生かし切れていないのは今後の課題といえる。高校では同様のメンタルヘルスチェックを実施してそれを各担任と共有し、後半の担任全員面接というシステムを実施している。大学においても前述のセンターを活かしつつ、学生支援のシステムを作っていきたい。

今年度は心理関係の国家資格である「公認心理師」の取得に努力した。本学では新しく「公認心理師」を取得するための科目が置かれるコースを新設する。その中には教員が資格を持っていない



ればならない科目もあり、「公認心理師」取得は必須であった。今後はこの資格を教育や心理治療に有効に使っていききたい。

以 上